

編集後記

平成 19 年度の藍野学院紀要第 21 号が完成しましたのでお届けいたします。

第 20 巻の編集後記にも書いたのですが、20 年を一区切りとしてみると今号は藍野紀要の新しい出発の第一歩にあたります。そして今年もまた、重要な一步に相応しい優れた論文が集まりました。これもひとえに藍野グループのみなさまのアカデミズムに対する意識の高さの現れかと思えます。

ところで『藍野』という名前は記紀にも現れる古い由緒ある言葉ですが、例えば電話などで相手に『藍野』というと『愛の』と誤解されてしまうことがあります。仕方なく「漢字は藍色の藍、そして野原、フィールドの野です」というように訂正するのですが、『アイノ』という音に『愛』という語感を感じるということは、決して悪い事ではないと思います。また、アイヌ人の『アイヌ』というのは、本当は『アイノ』と発音されるそうです。意味は、神（カムイ）に対する人間、なかでも行いの良い人間を意味する言葉だそうです。つまり『アイノ』という音には、愛とか良い人間という意味もあるわけです。これらは言葉遊びにすぎませんが、なかなか面白い偶然だと思いました。

一方で『藍』は出藍の誉れという成語にも見られるように、教育の隠喩としてしばしば用いられる言葉でもあります。何段階もの工程を経て徐々に発色する藍染めのことを人間の成長に見立てるわけです。瓶覗、水浅葱、浅葱、薄縹、浅縹、納戸、藍、紺、搦色、濃紺…… 染色液に浸ける毎に色が濃くなって行きます。同じように人間も、適切な指導により徐々に能力を開花させてゆきます。『藍野』という名は、まさにそういった教育の場、field として、相応しいものだと言えましょう。しかし何よりも誇るべきは、名前ではなく実体として、学究的な雰囲気が藍野グループの中に存在することだと思います。微力ながら本誌もその一端を担うべくこれからも努力を重ねてゆきたいと考えております。

最後に本誌の完成が遅れましたことをお詫びいたしますとともに、著者のみなさまをはじめ、査読を快くお引き受けいただいた先生方、そして膨大な事務処理を黙々とこなされた事務局の方々に深く御礼申し上げます。

(藍野紀要編集実施委員長：田中俊典)

藍野学院紀要 第 21 巻

平成 20 年 3 月 31 日

編集兼発行者 学校法人 藍野学院
〒 567 - 0012
大阪府茨木市東太田 4 - 5 - 4
電話 (072) 627 - 1711 (代)

印 刷 明文舎印刷株式会社
〒 601 - 8316
京都市南区吉祥院池ノ内町 10
電話 (075) 681 - 2741